

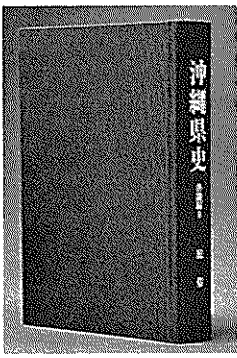
地域が育んだ知恵に光

秋道智彌

『沖縄県史 各論編9 民俗』

がこの春、刊行された。前回(『民俗1・民俗2』)の2巻本で本土復帰時の1972・73年のことであった。米ドルを使った時代から、2020年(令和2年)までの間、沖縄の民俗研究は飛躍的な成果を蓄積してきた。その成果が本書である。「民俗」という分野は、古い習慣やむかし生活を記述するものと思いきや、多くの人にも知れない。「たそがれ」の民俗学と揶揄する研究者も過去にはいた。

だが本書は沖縄の古い習俗をなぞるものではなくて、いま

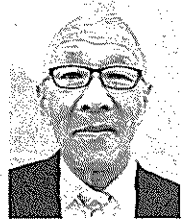


『沖縄県史 各論編9 民俗』

「沖縄県史 各論編9 民俗」発刊に寄せて

を生きてウチナンチュの生活世界を究明に記録し、かれらの育んできた技術と知恵に光を当てたものなのだ。沖縄の民俗が日本文化のなかでも独自の特質をもつ点には異論あるまい。しかも、島嶼ごとに民俗が異なり、多様である。かつて、民俗学者の上江洲均は、沖縄にある祭りや儀礼を全部、見るだけでも数十年はかかる、笑いながら私に語ったことがある。この言葉は重い。ふだん気のよさそうなオバアが儀礼のなかで神女(ノロ)に変身する。そんな世界が沖縄には随所にある。

本書で編集の専門部長として尽力された赤嶺政信がふれているように、なるだけ沖縄の広い圏を視野に入れるという配慮が随所に生かされている。全ページカラーの装丁も見ていても楽しめる。本書は6部構成からなる。人と自然、人と人、人と超自然の「かわり」を3本柱とする構成は明快である。山・川・海に展開する



あきみち・ともや 1946年京都府生まれ。山梨県立富士山世界遺産センター所長。理学博士(東京大学)、専門は生態人類学・漁撈(きょうりゅう)民族学。第44回伊波普猷賞受賞。「沖縄県史 各論編9 民俗」執筆者の一人。

自然と人のかかわりは従来の民俗研究にはない独創的な章である。私は復帰前年から八重山諸島を中心に漁業の調査をおこなってきた。ウチナンチュから聞く海の話は奥深い。いまでもかれらは「海の先生」との強い思いをもっている。かれらは本書の民俗の語り部でもある。それゆえ、本土復帰後に起こった大きな海の変化は心痛い。赤土の流入、新石垣空港建設、尖閣諸島、辺野古、那覇空港の拡張など、海を犠牲にすることに鈍感な政治家や企業人には憤りをいだかざるをえない。

ウチナンチュにも責任がないわけではない。むかしはかまぼこの材料であったエラブチ(ブダイ)はフーカー(送気式潜水装置)の使用で乱獲され、高値の魚となった。もっけ主義は海とともに生きるウチナンチュにとり「法度でなかつたか。 2020年4月、波照間島と宮古の伊良部島周辺でシユゴンが海草をはんだ痕跡が見つかつた。乱獲や藻場の減少などでシユゴンの個体数は激減した。沖縄の海が大きく変わるなか、シユゴンの復活は朗報である。辺野古の海を破壊する暴挙はいまこそ、立ち切るべきだ。 くり返すようだが、沖縄の民俗は過去の遺産を採る試みでは断じてない。地域ごとに育まれてきた人びとの知恵は「民俗知」と称される。本書は沖縄の民俗知の集大成といえるだろう。世界でも西洋中心の発想でなく、地域の民俗知を活用するごとの重要性が1990年くらいから了解されてきた。地域の軽視はあらゆる政策の失敗につながる。 東京一極集中の日本では、地域の良さを独自性が軽視されてい

る。地域の知恵に学ぶべきだとする主張は見直されるべきである。そのきっかけが2020年、世界で猛威をふるっている新型コロナウイルスである。自粛期間中、沖縄を観光やゴルフのために訪問した東京の人がいた。沖縄は素晴らしい観光地であることは間違いない。しかし、観光地である前に沖縄は独自の文化と民俗が息づく地域である。 今年発生した首里城火災に多くの人びとが落胆した。だが、復興に向けての取り組みは進みつつある。 世界遺産としてだけでなく、琉球王国の存立をささえた沖縄の人びとの思いが凝縮したのが首里城である。沖縄の歴史を採るうえで、基盤となった民俗文化にまなびしを向けることは不可欠の課題ではないだろうか。

教育委員会のホームページから購入申し込みができる。問い合わせは県教育庁文化財課史料編集班、電話098(88888)3939。